

京は水もの

えにし訪ねぶらり探訪

◆ 30 ◆

京都駅ビル「緑水歩廊」

いた「雨庭」(レインカーテン)の「伝道師」である。どういう意味?
汚水などと一緒には下水に流される雨水は一般に「ろすい」と呼ばれる。速やかに都市空間から排除される

あまみずの恵み有効に

ビル。その屋上に降った雨の一部を7階の貯水タンク(5.5)にため、階段を利用して置いた段々状のプランターに徐々に流下。上の階は里山、中層階は棚田・湿地、下の階は池沼と、ソーンごとに植える草花を変え、京都の原風景を再現し

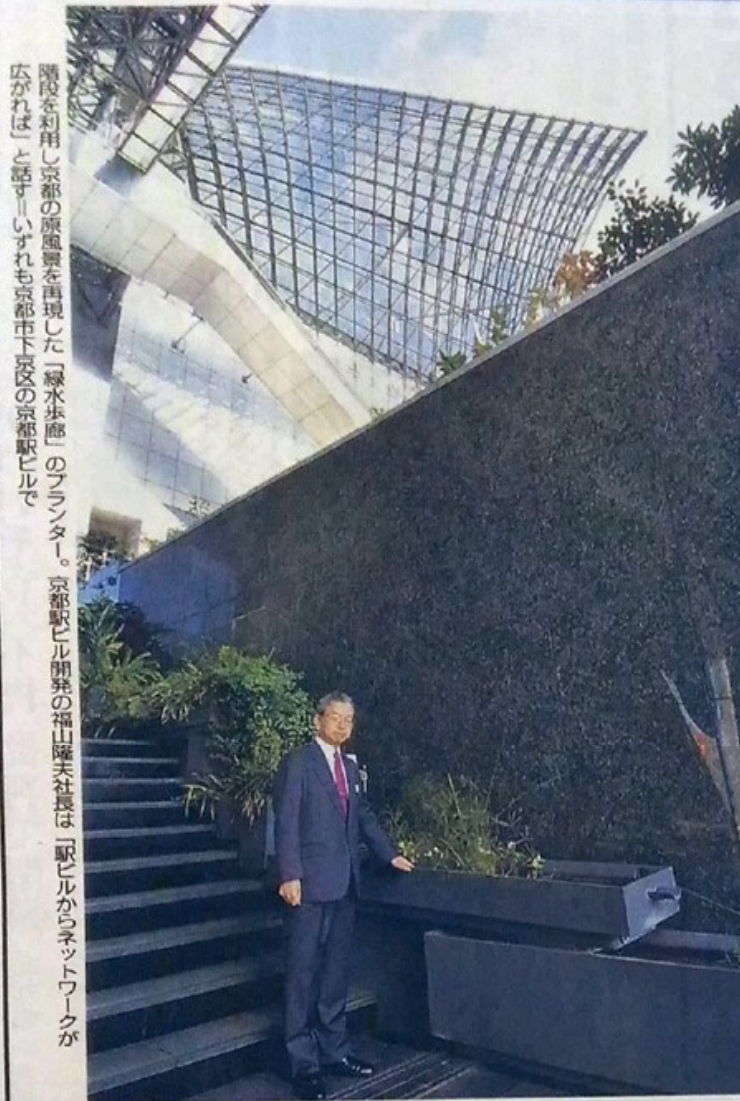
ため、100%自然力による水循環を実現。いわばビル型の「雨庭」である。京都駅ビル開発常務(管理部長)の高浦敏之さん(62)は「駅ビルは地球温暖化防止京都会議(COP3)の開かれた1997年にオープンしましたが、15周年

「雨水」と書いて「ろすい」と読むか、「あまみず」と読むか。それで天と地ほどの違いがある。
そんななぞなぞめいた言葉を投げかけるのは京都学園大バイオ環境学部の森本幸裕教授(観光デザイン)。前回連載に登場した

べき邪魔者という認識である。一方、「あまみず」という呼び方には自然の恵みとして感謝し、有効に利用しようという響きが伴う。ヒートアイランド現象の緩和や、散水や風呂水など

なかでも生物多様性を守る「環境蓄雨」の視点から注目される実践例が京都駅ビル(京都市下京区)の「緑水歩廊」である。地上16階建て。高さ約60m、東西約470mの巨大

ビルに誕生した憩いの場として好評。現在も展示を続け草花の生育状況や、昆虫のモニタリングを続けている。優れた実践例としてラムサール条約のホームページでも紹介されたが、注目すべきは既存のビルを、絶滅の恐れがある植物のレフュージア(避難場所)にする



階段を利用し京都の原風景を再現した「緑水歩廊」のプランター。京都駅ビル開発の福山隆夫社長は「駅ビルからネットワークを広げれば」と話す。いずれも京都市下京区の京都駅ビルで

